

主 題：来る者を拒む主3

聖書箇所：マルコの福音書 10章28－31節

前回、前々回と同じように三つの福音書、マタイ19章、マルコ10章、ルカ18章を見て行きます。

◎求道者

私たちクリスチヤンの世界にあって、よく「求道者」ということばを使います。この「求道者」ということばは主の事柄に興味を持っている人、また、聖書やキリスト教に関心のある方、そして、救われないと願っている人たちに対して一般的に使われることばです。けれども、私たちがこのことばを、もし単にそのような人たちを指して使うとするなら、私はこのことばは余り聖書的な表現ではないのではないかと思います。なぜなら、パウロが言うように、実は神を求める人はいないのです。ローマ人への手紙3：11に「…神を求める人はいない」とはっきりと記されています。それなら、「求道者」ということば自体がおかしいと思いませんか？自分自身のうちから神を求めたいと思う人たちは存在しないと聖書は私たちに教えます。「使徒の働き」17章で、パウロがアテネのアレオパゴスの丘で説教をした時に、主を探し求めるなら近くにいて見つけることができると確かに言っていますが、実際には、だれ一人として自分自身から進んで神を求める人間は存在しないと聖書は教えます。事実、人々は神がいることを知っていながら、神がどのような方であるのかという大まかではあってもその特徴を理解していながら、人間は神を無視し、神の代わりに自分の願望を聞いてくれる、自分にとって都合のいい神を造り続けて来たこと、パウロはローマ人への手紙1章で言っています。

◎金持ちの青年が求めていたもの

私たちがここで何回か見て来たように、若い金持ちの役人は人間の観点から見ると、確かに、非常に熱心な「求道者」でした。私たちがこの記事を単に読むだけなら、この青年は心から熱心に永遠のいのちを追い求めてイエスのもとにやって来て、そして、キリストを受け入れる準備が整っているように思えます。けれども、イエスは彼を追い返したのです。イエスはこの青年のうちに、主ご自身を慕い求める心ではなく、それ以外のものを追い求める心を見出していたからです。もし、この青年が教会にやって来たなら、または、何か特別な伝道集会にこのような青年がやって来たとするなら、今日、私たちクリスチヤンはきっと、いや、ほぼ間違いなくこの熱心な「求道者」を喜んで教会に迎え入れ、この人が教会の一員になるようにとありとあらゆる手段を尽くすのではないかと思います。何よりも、「私は信じたいのです」と言う人をいったいだれが追い払うでしょう？けれども、まさにそのことを主はこの青年にしたのです。

私たちは最初に、この青年と主の会話を見ました。そこで、この青年が熱心な思いをもって主のもとにやって来たにもかかわらず、彼がキリストに従うことをしないで、悲しみのうちに去って行ったことを私たちは見て来ました。この青年はイエスが神と特別な関係にあるということを確認して理解していました。それゆえに、彼はイエスのことを「尊い先生」と呼んだのです。「良い先生」とこのように人が教師のことを指して言うことはありませんでした。この「良い」というのは、まさに彼がこの主が神と特別な関係にあるということを確認していた、その表現に違いないのです。けれども、この方が神と特別な関係にあり、神からの教えを受け、神のことばを伝えることができると認めていながら、この青年はイエスが「あなたはこのようにしなさい」と言われることに従うことができませんでした。いや、従うことをしなかったのです。彼は永遠のいのちが欲しくてしょうがないと思ひ、恥も外聞もなく、群衆の目の前で主の前にひざまずいて、どうすれば私は永遠のいのちを得ることができるのでしょうかと尋ね、神との関係をもつがゆえに得ることができるあふれんばかりの喜びに満ちたその生涯を願い求めていたにもかかわらず、彼はそれを得ることなく帰ったのです。なぜなら、この青年は自分のもっていた人生と別れることができなかつたからです。

イエスはこの青年に対して、すべてを捨ててわたしに従って来なさいと要求しました。けれども、この要求はこの青年だけに与えられた特別な要求ではありませんでした。以前にも見たように、この教えは主が継続してずっとその働きの初めから人々に求め続けたことでした。主は何度も「自分を捨ててわたしに従って来なさい」と言われました。特に、イエスはマタイの福音書16：24－26で「それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。：25 いのちを救おうと思う者はそれを失い、わたしのためにいのちを失う者は、それを見いだすのです。：26 人は、たとえ全世界を手に入れても、まことのいのちを損じたら、何の得がありません。そのいのちを買い戻すには、人はいったい何を差し出せばよいでしょう。」と言います。けれども、こ

の青年は地上の富を保ち、自分のいのちを捨て去ることを選択したのです。

◎本当の「求道者」：神が求める人

前回、私たちがこの箇所からみことばを学んだ時に、私たちは主が救いの可能性を完全に否定する姿を見ました。当時の人々は、金持ちが一番神の国に近いと考えていましたが、そのような考え方に反して主は宣告されたのです。金持ちが天の御国に入ることは困難である、いや、不可能であると。しかも、それは金持ちだけのことではありませんでした。マルコの福音書10：24には「**子たちよ。神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょう。**」と記されています。このことばはすべての人に対して向けられています。主は、だれもが天の御国にはいることは不可能であるということをここで教えていたのです。そのことをどのように説明されましたか？25節「**金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。**」と主は言われました。この「針の穴」というのは、エルサレムの城壁にあった小さな門のことではありません。歴史上、そのような門はかつて見つかったこともないし、またそれがあったという証拠のかけらもないのです。イエスがここで言われたことは、実際の針のことです。実際の針の穴に、当時パレスチナで最も大きい動物と考えられていた「らくだ」が通ることができますかと尋ねたのです。答えは明らかです。それは不可能です。イエスはここで確かに、弟子たちに対して、だれ一人として天の国にはいることができないということを教えようとしたのです。そのことを聞いた弟子たちは、当然、驚きのうちにこのように尋ねました。26節「**それでは、だれが救われることができるのだろうか。**」と。私たちはここでイエスが答えられたことばにしっかりと耳を傾けなければいけません。イエスはマルコの福音書10：27で、「**それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。**」と言われました。人間には神の国にはいる力がないのです。人間が何をしても神の国にはいることはできないのです。それゆえに、人には救いは不可能なわざです。人は永遠のいのちを得ることができないのです。けれども、神にはそれができる。神にはらくだが針の穴を通ることをさせることができます。同じように、人が神の国にはいることができるように神は働くことができます。ヨハネはこのように記します。ヨハネの福音書1：12-13には「**しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった。：13 この人々は、血によってではなく、肉の欲求や人の意欲によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。**」

人間にとって唯一の希望は何でしょう？それは、このすばらしいわざを実現することができる神がいるということです。この神は罪と咎の中で死んでいた人々にいのちを与えることができます。そして、この神によって召された者たちは、真の福音の召しに対して喜んで「はい、従います」と言って応えることができます。

本物の求道者というのは救われたいと願っている人ではありません。それは神に求められている人たちです。神が求める人たちです。イエスはこのように言われます。「**わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。**」（ヨハネ6：44）と。だれがイエスのもとに来るのでしょうか？だれがイエスを求めてやって来るのですか？救いを求める人たちではありません。神が引き寄せる人たちです。このような人たちにとって、どのような要求も応えることができない要求ではありません。どのような犠牲も大き過ぎる犠牲ではありません。それこそが、イエスが迎え入れる人の姿だからです。

☆だれが永遠のいのちを手にするのか？

この金持ちの青年のことを学んで行く中で、そして、イエスと弟子たちとの会話を見て行く中で、私はこの箇所が聖書全体の中であって、「救いの性質」というものを私たちにはっきりと教える、そのような箇所の一つだろうと心から思い始めました。学べば学ぶほど、私たちはこの救いに関するすばらしい、そして同時に、非常に恐ろしい事実に向き合わされて行きます。今朝、私たちはこの一連の会話の最後の部分を皆さんと一っしょに見て行きます。イエスと弟子たちがこの一連の出来事に関する最後の会話を交わして行くところです。ここで主ははっきりと、いったいだれが永遠のいのちを得ることができるのかを宣言しています。だれが永遠のいのちを手に入れることができるのか？別な言い方をすれば、だれがクリスチャンなのか、だれが救われているのか、だれが天国に行くことができるのかです。皆さん、聞きたいと思いませんか？重要だと思われませんか？この非常に重要な会話の中で私たちは（1）真のクリスチャンの歩みはどのようなものか、（2）真のクリスチャンに対する約束とはどのようなものか、そして（3）真のクリスチャンに与えられている格言とはどういうものか、それを見ることができます。これら三つの事柄を通して、私たちの主は「救いの条件と救いの報い」を私たちに教えてくれるのです。私が心から願っていることは、皆さんと一っしょにこの箇所を見て行くに当たって、私たち皆が注意深くこれらの事柄を考え、そのことをしっかりと理解することを通して、クリスチャンである私たちが自分がどのような者であり、自分に与えられている約束が何であり、どのように私たちがそれを喜び、その歩みをしっかりと為して行くのかを考えて行くことができることです。

クリスチャンでない皆さん、皆さんには神が求めているその要求を知っていただきたいと思います。神の要求をしっかりと理解して、それにしっかりと応えて行くなれば、神が皆さんに与えようとしている永遠のいのちを皆さんは得ることができます。

マルコの福音書の10：17－31までを読みましょう。

：17 イエスが道に出て行かれると、ひとりの人が走り寄って、御前にひざまずいて、尋ねた。「尊い先生。永遠のいのちを自分のものとして受けるためには、私は何をしたらよいでしょうか。」：18 イエスは彼に言われた。「なぜ、わたしを『尊い』と言うのですか。尊い方は、神おひとりのほかには、だれもありません。」：19 戒めはあなたもよく知っているはずですが、『殺してはならない。姦淫してはならない。盗んではならない。偽証を立ててはならない。欺き取ってはならない。父と母を敬え。』」：20 すると、その人はイエスに言った。「先生。私はそのようなことをみな、小さい時から守っております。」：21 イエスは彼を見つめ、その人をいつくしんで言われた。「あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。そうすれば、あなたは天に宝を積むことになります。そのうえで、わたしについて来なさい。」：22 すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。なぜなら、この人は多くの財産を持っていたからである。：23 イエスは、見回して、弟子たちに言われた。「裕福な者が神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょうか。」：24 弟子たちは、イエスのことばに驚いた。しかし、イエスは重ねて、彼らに答えて言われた。「子たちよ。神の国にはいることは、何とむずかしいことでしょうか。」：25 金持ちが神の国にはいるよりは、らくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。」：26 弟子たちは、ますます驚いて互いに言った。「それでは、だれが救われることができるのだろうか。」：27 イエスは、彼らをじっと見て言われた。「それは人にはできないことですが、神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。」：28 ペテロがイエスにこう言い始めた。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」：29 イエスは言われた。「まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、：30 その百倍を受けない者はありません。今のこの時代には、家、兄弟、姉妹、母、子、畑を迫害の中で受け、後の世では永遠のいのちを受けます。」：31 しかし、先の者があとになり、あとの者が先になることが多いのです。」

1. 真のクリスチャンの歩みとは

私たちは最初に、ここから真のクリスチャンの歩みというものがあるのかを見て行きます。28節から見て行くのですが、そこで私たちはクリスチャンになるということがどういうことなのか、信徒になるということがどういうことなのか、そして、クリスチャンが歩む生き方とはどんなものなのかを見て行くことができます。事実、このことは（1）弟子たちの口からの告白、そして、（2）主からの宣告という二つの事柄を通して見ることもできるのです。

（1）弟子たちの告白

28節には「ペテロがイエスにこう言い始めた。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。」とあります。ここで私たちは弟子たちの告白を見ることができます。真のクリスチャンとしての歩みはどんなものか、私たちは弟子たちのことばにそれを見ることができるのです。金持ちの青年が去って行った後、「だれも救われることはできない」というイエスの驚くべきことばを聞いた弟子たちには、一つの疑問がわき上がっていました。抑えることができなかったのでしょうか。そこでペテロはいつものようにことばを發するのです。でも、ここに「**私たちは**」とあるように、ペテロは自分だけのことを言っていたのではなく、十二弟子の代表としてこの質問をしたのでしょうか。ルカの福音書18：28では「**すると、ペテロが言った。「ご覧ください。私たちは自分の家を捨てて従ってまいりました。」**」と記されています。この「**家**」ということばは、本来ここにあるべきでないことばです。欄外を見ていただくと、そこには直訳として「自分たちのもの」と記されています。なぜここで、翻訳者が「家」ということばを入れたのか私にはよくわかりませんが、実際に言っていることは、自分たちのもつありとあらゆるものことです。何もかも、私たちのものすべてを捨てて（そこには家も含まれていました）、ありとあらゆるものを捨てて、私たちは従って来ました。金持ちの青年がすることができなかったことを私たちはして来たのですと、彼らはそのようにイエスに訴えたのです。

イエスの要求を和らげようとする人たちはたくさんいます。けれども、救いはいったいどのようなものなのか、弟子たちはよくわかっていました。いったい、イエスが金持ちの青年に求めた要求とは何だったのか、弟子たちはそのことがよくわかっていたのです。彼はすべてを捨ててあなたに従って来なかったけれども、私たちはすべてを捨ててあなたに従って来ましたと言います。それがこの会話を通して彼らが理解していたことなのです。イエスは金持ちの青年にすべてを捨ててわたしに従って来なさいと要求されました。そして、これこそがまさにこの青年に唯一欠けたことではありませんでしたか？

マルコは21節でイエスのことばをこのように記しています。「**あなたには、欠けたことが一つあります。帰って、あなたの持ち物をみな売り払い、貧しい人たちに与えなさい。…**」と。そして、弟子たちはイエスに訴えたのです。「**見てください、私たちはそのようにしたのではないですか。私たちはすべてを捨ててあなたについて来ました。」**と。ペテロはよく大げさに表現をします。ペテロの姿を見るといつも大げさ

です。でも、ここでの表現は決して大げさなものではありません。まさにそれは事実だったのです。彼らは確かにすべてを捨ててイエスに従って来たのです。

確かに、私たちは12人すべての人の記録を見ることはできませんが、少なくとも、何人かのことは知っています。例えば、ペテロやアンデレ、そして、ヤコブやヨハネという漁師たちは、ガリラヤ湖で漁をしていた時にイエスがやって来て、イエスが「あなたがたを人をすなごる漁師にする。ついて来なさい」と言われたとき、彼らは網を捨て、船を捨て、家を捨て、家族を捨て、イエスについて行ったのです。彼らは確かにすべてを捨てました。マタイは取税所全体を管理していた取税人でした。イエスが彼の前に立った時に、イエスは「私について来なさい」と言ったのです。マタイはその場で立ち上がってすべてを捨ててイエスについて来ました。彼にはもう戻る場所がありませんでした。取税人という地位を捨てた彼は、もう一度その職に就くことはできません。もうほかの人がその職に就いているからです。彼は自分の財を捨て、自分の名誉を捨て、すべてを捨ててイエスに従って行ったのです。熱心党のシモンという人物もいました。熱心党というのは、現代風に言うならテロリスト、過激派です。彼らは聖書の律法を字義的にとらえ、それに逆らうあらゆる者たちに対して武力をもって、力をもって抵抗しました。彼らはローマ帝国にとって頭痛の種でした。あらゆる時に彼らは反抗し、彼らはそのような危険を犯してまで、武力をもってまで神の民を守ろうとする人たちでした。熱心党のシモンはその一員だったのです。そのシモンがイエスに従って行きました。私たちは福音書の中に彼が召される場面を見ることはできないのですが、想像してみてください。そのような過激派の一員として活躍していた人物が、ある日突然、イエスに従うようになるのです。戻れると思いますか？彼らは自分たちの人生をかけて、今まで築いて来たものすべてを捨てて、イエスに従って行ったのです。一人ひとり、いろいろなものを捨てて来たのです。彼らにはもう戻る場所はなかったのです。彼らは確かに、金持ちの青年ができなかったことを行なっていたのです。

ちなみに、ペテロは12人を代表して話をしましたが、この時点で、ペテロはそこに一人すべてを捨てていなかった者がいることを知りませんでした。皆さん、だれかご存じですね。その人物、イエスを裏切ったユダはすべてを捨ててはいませんでした。彼は金持ちの青年と同じように、すべてを捨てないで、形だけイエスに従っていたのです。彼は片手にこの世をつかみながら、もう一方の手でイエスをつかもうとしていたわけです。でも、弟子たちは彼のことにまだ気づいていませんでした。だから、ペテロは十二弟子を代表してこの質問をしたのです。「私たちはすべてを捨てたではありませんか。そして、あなたに従って来たではないですか？」と。

◎みことばによる証明1：召された者は神のみことばに従う

このような人物こそが、実は神によって召された人たちでした。神によって引き寄せられた人たちは、イエスが要求することに対して「はい、私はします」と答えるのです。イエスは何度も何度も私たちに、神が人々をキリストのもとに連れて来ると言います。ヨハネの福音書の6：37には「父がわたしにお与えになる者はみな、わたしのところに來ます。そしてわたしのところに來る者を、わたしは決して捨てません。」とあります。6：44では「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに來ることはできません。わたしは終わりの日にその人をよみがえらせます。」と言います。6：65には「そしてイエスは言われた。「それだから、わたしはあなたがたに、『父のみことばによるのでないかぎり、だれもわたしのところに來ることはできない。』」と言ったのです。」とあります。ヨハネの福音書の15：16では「あなたがたがわたしを選んだのではありません。わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命したのです。」と言います。

◎みことばによる証明2：召された者は神のみことばに従う

また、イエスはこのように召された者たちが神のみことばに従うことを教えています。ヨハネの福音書8：47には「神から出た者は、神のみことばに聞き従います。ですから、あなたがたが聞き従わないのは、あなたがたが神から出た者でないからです。」と言います。10：27では「わたしの羊はわたしの声を聞き分けま。またわたしは彼らを知っています。そして彼らはわたしについて來ます。」と言います。14：15では「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」と言いました。14：21では「わたしの戒めを保ち、それを守る人は、わたしを愛する人です。わたしを愛する人はわたしの父に愛され、わたしもその人を愛し、わたし自身を彼に現わします。」、14：23-24では「イエスは彼に答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのみことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに來て、その人とともに住みます。：24 わたしを愛さない人は、わたしのみことばを守りません。あなたがたが聞いていることばは、わたしのものではなく、わたしを遣わした父のみことばなのです。」と続けます。15：10「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。それは、わたしがわたしの父の戒めを守って、わたしの父の愛の中にとどまっているのと同じです。」、そして、14節「わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です。」と。

神が私たちにさせるようにしない限り、私たちは神に従うことはできないのです。パウロはピリピ人

への手紙2：13で「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行なわせてくださるのです。」と言いました。私たちにそれをしたいと願わせるのは神です。神が私たちにその願いを与え、それができるようにしてくれると言うのです。前回、私たちは申命記30：6-8の箇所を見ました。そこに何が記されていたか皆さん覚えておられますか？「あなたの神、主は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、主を愛し、それであなたが生きるようにされる。：7 あなたの神、主は、あなたを迫害したあなたの敵や、あなたの仇に、これらすべてののろいを下される。：8 あなたは、再び、主の御声に聞き従い、私が、きょう、あなたに命じる主のすべての命令を行なうようになる。」と、モーセはこのように語りました。どうして主の御声に聞き従い、主が命じるすべての命令を行なうようになるのでしょうか？神が私たちの心の包皮を切り取ってくださるからです。神がその働きを為してくださったときに、私たちは神の力によって初めて完全に全うすることができるようになるからです。これは主の働きなのです。そして、主が私たちのうちに働かれるときに「主に従うこと」は、自然にクリスチャンの生涯の中にあふれ出て来る歩みです。これこそまさに、弟子たちがしたことでした。これが真のクリスチャンがする歩みなのです。

(2) 主からの宣告

彼らの告白を聞いてイエスは彼らにこのように言われました。29節「まことに、あなたがたに告げます。」と言いはじめますが、マタイの福音書19：28を見てください。ここでペテロのことばに対してイエスは「そこで、イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。」と答えられるのです。イエスはここで「わたしに従って来たあなたがたも」と言っています。つまり、イエスはここで彼らのことを認めているのです。確かに、あなたがたはわたしに従って来たと言っているのです。金持ちの青年のように、自分の人生にしがみついてそれを捨てることをしないでイエスに従わなかったのではなく、彼らはすべてを捨ててキリストに従って行ったのです。けれども、ここでイエスが言われていることは、この12人だけのことではありませんでした。マタイ19：29では「また、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、あるいは畑を捨てた者はすべて、その幾倍もを受け、また永遠のいのちを受け継ぎます。」と言います。マルコとルカはここでこの同じことばを否定的な表現を使って語っています。「まことに、あなたがたに告げます。わたしのために、また福音のために、家、兄弟、姉妹、母、父、子、畑を捨てた者で、その百倍を受けない者はありません。」(マルコ10：29-30)と。ルカ18：29-30は「イエスは彼らに言われた。「まことに、あなたがたに告げます。神の国のために、家、妻、兄弟、両親、子どもを捨てた者で、だれひとりとして、：30 この世にあってその幾倍かを受けない者はなく、後の世で永遠のいのちを受けない者はありません。」とあります。そのような人、報いを受けない人はだれもいないと言うのです。すべてを捨ててわたしに従って来た人で報いを受けない人はだれもいないと言うのです。

つまり、イエスは十二弟子と同じように、すべてを捨てて従った人たちのことを話しているのです。ここで、すべての人たちがしたことを見てください。家を捨て、兄弟を捨て、姉妹を捨て、父を捨て、母を捨て、子どもたちを捨て、畑を捨ててやって来たのです。イエスに従った者は何か残して来たでしょうか？自分のものとして何かを取っていましたか？彼らはすべてを捨てて来たのです。彼らが最も大切だと思っていた関係を捨て、彼らが心から楽しみとし喜びとしていたその所有物を彼らは捨てたのです。そのようなものは彼らの人生にとって、彼らの生涯にとって、最も大切な関心ごとではなくなりました。それよりもはるかにすばらしいものをそれらと置き換えたのです。

イエスのことばを聞いてください。マタイの福音書10：37-38です。「わたしよりも父や母を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。また、わたしよりも息子や娘を愛する者は、わたしにふさわしい者ではありません。：38 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしにふさわしい者ではありません。」と言います。皆さん、ご存じですね。ルカの福音書14：26-27には同じことがもっと厳しく記されています。「わたしのもとに来て、自分の父、母、妻、子、兄弟、姉妹、そのうえ自分のいのちまでも憎まない者は、わたしの弟子になることができません。：27 自分の十字架を負ってわたしについて来ない者は、わたしの弟子になることはできません。」。イエスが教えていることは、親、兄弟、家族を憎みなさいということではありません。それはみことばの教えに反することです。イエスが言っているのは、わたしを愛することと、それ以外の者たちを愛することを比較するなら、わたしに対する愛が余りにも偉大なものであるゆえに、それ以外のものには全く関心がなくなってしまうということです。

このルカの箇所もマタイの箇所も同じことを言っています。キリストに従う者にはキリストご自身よりも愛するもの、より重要だと思ふものは一切ないと言っているのです。そして、この両方に「自分を捨て、十字架を負って従って来なさい」と記されています。つまり、これらすべてに対してあなたは死になさいと言うのです。死んだ者となってわたしに従って来なさい、このような決心なくしてキリストを信じることはできません、キリストに従うことはできませんと。このような決心をして私はキリスト

が最も重要であり、私が私の人生の中で何よりも関心があるのはイエス・キリストです。私の人生において何よりも私が忠実を誓うのはイエス・キリストですと言わなければ、そういう者でなければ、その人はクリスチャンではないのです。もし、そのような献身なくして永遠のいのちを追い求めている人なら、それは金持ちの青年がイエスを求めたのと同じです。もしそうなら、金持ちの青年に対したと同じように、イエスは皆さんのことを追い払われます。なぜなら、私たちは片手にこの世をつかみつつ、もう一方の手でイエス・キリストをつかむことはできないからです。片手でこの世の人生を楽しみつつ、もう一方の手で永遠のいのちを得ることはできないのです。このような決心は大きな犠牲を伴うものです。ここにあるように、さまざまな人間関係を失い、さまざまな財産を失うかもしれません。名誉や地位、そのようなものを失うことがあるでしょう。けれども、神によって召された者たちは、それらすべてを捨てて主に従うのです。なぜでしょう？神がそのように働かれるからです。

彼らにとってそれらの犠牲は大きなものではないのです。彼らは喜んでそれをしたと願うからです。彼らは何のためにそのことをすると言っていましたか？三つの福音書すべてがその表現は違いますが、マタイは「わたしの名のために」と言います。「福音のために」とマルコは加えています。「神の国のために」という表現がルカにはあります。けれども、言われていることはみな一つです。それは、イエス・キリストご自身が教えられたメッセージです。主は福音のためにわたしはすべてを捨てますと言われました。キリストご自身とその教えを受け入れ、その教えに対して完全な忠誠を誓うこと、そうすることによって、人々はすべてを捨ててキリストに従って行くのです。この忠誠を誓うことによって、私たちは今まで自分自身を定義づけてきたあらゆる事柄を横にやって、私はこれからはこのような生き方をするのではなく、主に従って主に忠実に歩んで行くことと表明するのです。これがキリスト教の核心です。私たちの忠誠という非常に大きな交換があるのです。真のクリスチャンはみなこの交換を行ないました。私自身とキリストとを交換したのです。真のクリスチャンというのはキリストのためにすべてを捨てることを良しとした人です。自分の愛するすべての事柄とキリストを交換した者です。それこそが永遠のいのちを求める者たちに対して突きつけられている条件なのです。

金持ちの青年はこの条件をのみたいたいと思いませんでした。彼は永遠のいのちを心から求めていたのですが、彼は聖書的な意味で真の求道者ではなかったのです。弟子たちはすべてを捨ててキリストに従っています。彼らにとって、犠牲は重要な事柄ではありませんでした。問題は皆さんがどちらかです。皆さんが金持ちの青年に属するのか、それとも弟子たちに属するのかです。クリスチャンの歩み、クリスチャンとはどのような者か、私たちは今ここでそのことを見ました。弟子たちが告白し、イエスが宣告したのです。弟子とは、クリスチャンとはどのような人物かと言うと、「すべてを捨ててキリストに従う者」なのです。

2. 真のクリスチャンに対する約束とは

では、その弟子たちに与えられている、真のクリスチャンに与えられている約束とはどのようなものなのでしょう。ここで私たちが見ることができることを幾つか考えて行きたいと思いますが、二番目のポイントとして私たちが見ることができる約束は、実は、三つの区分をすることができます。マタイの福音書19：27を見ると、ペテロのことばがこのように続いていることが記されています。「そのとき、ペテロはイエスに答えて言った。「ご覧ください。私たちは、何もかも捨てて、あなたに従ってまいりました。私たちは何がいただけるのでしょうか。」と。確かに、このことばを聞くとペテロ、また十二人の弟子たちが自分たちの得のために、何か得るためにこの質問をしているように聞こえるかもしれません。確かに、ある意味そうだったのでしょ。けれども、私たちが気づかなければいけないことは、この質問に対してイエスはひと言もペテロを責めていないということです。いや、むしろ責めるどころか非常にいていねいにペテロに対して、十二人の弟子たちに対して、そして、私たちに対して、私たちが受ける分が何なのかを解説してくださっています。

私たちはこのことを知るべきです。神が何を約束してくださっているのか？金持ちの青年は自分の財産を保ったわけですから、この地上において彼は非常に裕福な生活を送ることができたでしょう。喜びを持って生きることができたでしょう。でも、私たちは全部捨てて来たではないですか、いったい私たちに何があるのですか？と皆さんもそのように聞くことがあるかもしれません。イエスはそのことに対して私たちに答えを与えてくれるのです。イエスは答えを三つ与えています。一つは今のこと、もう一つは未来のこと、そして、最後が永遠のことです。今、私は時計を見てびっくりしているのですが、幸いなことに来週もこの時間があるので、今日は無理して最後まで行く必要はありません。最初の一つを見て今日は閉じたいと思います。

(1) 未来に関する約束

これは皆さんに余り直接的には関係のないことです。なぜなら、最初に私たちが見ようとしていることは12人の弟子たちに対して、特に語られていることばだからです。だから、マタイの福音書にしか

このことは記されていません。それは「未来に関する約束」です。これを最初に見ます。なぜなら、これがイエスが語られた順番だからです。「**私たちは何がいただけるのでしょうか**」という質問に対して、イエスはこのように答えました。マタイ19：28「**まことに、あなたがたに告げます。世が改まって人の子がその栄光の座に着く時、わたしに従って来たあなたがたも十二の座に着いて、イスラエルの十二の部族をさばくのです。**」、ここに私たちは未来における約束を見ることができます。この28節でイエスが語っているその表現は何を指しているのでしょうか？簡潔にまとめるなら、それは千年王国でのことです。この地上における7年間の患難時代の後に、イエスが君臨されてすべてを支配される千年間の王国のことです。旧約聖書に約束されている神がイスラエルと結んだ契約の成就として、この地上において確立される千年間の王国のことです。「**世が改まって**」ということばがここに出て来ますが、これは救いのことではなく、この世界全体が新しいものになるといえることです。使徒の働き3：19-21を見ても、ペテロがメッセージの中でこの話をしてしています。またローマ人への手紙8：18以降を見ると、この地上が神の子たちの現われを待ち望んでいるということが記されています。それがこの千年王国のことなのです。その時に何が起こるのでしょうか？メシヤであるこの主はこの地上に君臨されるのです。そして、この世界を治められます。この世界を回復されるのです。

今、私たちの生きているこの地上は、神によってのろわれた地上です。アダムとエバが罪を犯す前は、この地上はすばらしい地上でした。そこには病気もなく、死もありませんでした。そこには争いもありませんでした。災害もありませんでした。けれども、アダムとエバが罪を犯して、この地上は神によってのろわれたのです。この世界は神によってのろわれたのです。なぜ、このようにいろいろな災害があると思いますか？その理由は何でしょう？私たちが罪を犯したからです。それ以外の何ものでもありません。ですから、私たちは災害が起こる時に、神がいかにかこの罪を憎んでおられるのかを知ることができるのです。けれども、主が御座に君臨される時に、真理に基づいて、義と平和がこの地上を支配します。そして、この地上にかけられたのろいがすべて取り除かれます。聖書はそこでどのようなことが起こるかをこのように言います。例えば、獅子（ライオン）が羊といっしょに寝る、子どもが蛇と戯れる、危険がないのです。人々は長く生きるゆえに、100歳で死んでも何かあの人には問題があったのではないと言われるのです。そこは、多くの収穫に満ちたすばらしい世界です。それはまるでエデンの園が回復したようなものです。そこにあって世界の中心となるのが、イエスが君臨される回復されたエルサレムです。そして、主ご自身がそのエルサレムにおいて偉大な御座に着かれ、この世界を統治されます。イスラエルは悔い改め、神のもとに再び引き寄せられ、神からの完全な祝福を受けて神と特別な契約を結んだ民としての働きを為して行くのです。その時に、十二人の弟子たち——ここにはユダはいませんが、多分、マッテヤが入っていると思いますが、その十二人の弟子たちは十二の部族を治める御座に着くと言います。それが、イエスが彼らに約束したことでした。彼らはすべてを捨てて、イエスに従ったその報いとして、来るべき千年王国において、主の御座のもとで十二の部族を治めるその座に着くのです。いったい、私たちは何をいただけるのでしょうか？イエスは言います。あなたはわたしとともに御座に着いて、人々を治める者になる、その報いは大きいと。

このことばを聞いて十二人の弟子たちはどのように思ったでしょうね。彼らは確かに、このことを待ち望んでいました。いったい、いつそれが来るのかわかりませんでした。よく思い出してください。ヨハネとヤコブは母親に頼んで、イエスに何を願いましたか？マタイ20：21「**イエスが彼女に、「どんな願いですか。」と言われると、彼女は言った。「私のこのふたりの息子が、あなたの御国で、ひとりはお右に、ひとりはお左にすわれるようにおことばを下さい。」**」と母親はイエスのところをお願いに来たのです。彼らはこの地位を求めていたのです。イエスは言われました。確かに、あなたがたに対する報いは非常に大きなものだ。私たちが聖書を通して知っていることは、私たちクリスチャンはキリストの花嫁として迎え入れられ、この千年王国において、キリストの妻として主とともに君臨する者になります。確かに、その役割は使徒たちとは違うでしょう。けれども、私たちもまた同じ祝福にあずかるのです。待ち望みませんか？もっと具体的なことがこの後に記されています。来週、皆さんといっしょに見て行きましょう。

でも、考えてみてください、皆さん。皆さんはその祝福を受ける生き方を行なっておられますか？皆さんはその祝福に入れますか？天の御国の門を皆さんは通って行くことができますか？イエスは言います。「狭い門から入りなさい。」と。皆さんは針の穴から通っておられますか？すべてを捨てて、イエスに従っていますか？問題はそこです。ぜひ、皆さんがその選択をしてくださることを心から願いますし、もし、それがまだであるなら、皆さんはそのことをしなければいけません。

